

史遊会通信

No.242号
平成27年
5月10日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

四月講演要旨

神道界を沸騰させた明治祭神論争

村上 邦治

一 維新政府の宗教政策

明治維新は、幕末に広がった本居宣長の国学や平田篤胤の復古神道から、精神的原動力を得た尊皇攘夷運動により、徳川倒幕に成功し、成し遂げられた。こうした背景から、維新政府の当初方針は、神道中心の祭政一致による王政復古体制であった。この体制の象徴は、神道家や国学者が求めた、古代律令体制の神祇官再興であった。

西欧諸国が強く要請した、政教分離と信教自由（キリスト教解禁）に対し、日本独自の宗教である神道の取り扱いに苦慮した。維新政府は、天皇中心体制維持のため、神道から宗教部分を分離することで、神道や神社は宗教ではなく、国家の祭祀であるとした。日本

人は、宗教を超越した神道を、皆崇拜すべしとしたのである。これらにより政教分離は成立しているとした。一方、キリスト教の脅威を、何としても防ぐことが、課題であった。

キリスト教進出対策として、明治三年「大教宣布の詔」が出され、国民教化に力を入れることを宣言した。その為、神官と僧侶が教導職に任命され、一体となって教化運動を推進、その中央組織として大教院が設立された。教化統一の為、「三条の教則」、「一一兼題」、「一七兼題」が作られたが、その内容は、神道の教義に近く、仏教側特に真宗は、一体となつての教化運動に不満が強く、大教院から独立する動きが、顕著となつていた。

例会のお知らせ

◎ 五月例会

日時 平成二十七年五月二十七日(水)
午後六時十分〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 中込 勝則氏

テーマ 遙かなる河西回廊の旅

六月号自由執筆 千坂精一、新井宏、

柴田弘武の諸氏 締切五月末

◎ 六月例会

日時 平成二十七年六月二十四日(水)
午後六時十分〜八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

講演 三戸岡道夫氏

テーマ 未定

七月号自由執筆 瀧沢中、宇野正雄、

高橋正彦の諸氏 締切六月末

こうした政府の神道国教化政策と国民教化運動の真最中に、神道上の教義を巡り、全国神官を二分する大論争が、六年にわたって起き、かつてない事態に陥ったのである。

二 祭神論争勃発

祭神論争の主役は、出雲大社宮司千家尊福であった。大教院時代、神道会議にて、伊勢派が主張する造化三神（天之御中主神、高御産巢日神、神産巢日神）と、天照大神の四柱神に加えて、大国主神を表名合祀することを提議したのである。この時は、仏教側の離反運動が起きており、神道内部での内輪もめは得策でなく、八百万神を加えることで、出雲派と伊勢派は妥協した。

仏教各派は結局、大教院から独立、神道界は、神道事務局を設立して、これに対抗した。この事務局の新神殿には、四神と八百万神を祀る事で決着していたが、明治八年の第一回神道会議に、再度尊福は、大国主神を表名合祀することを提議したのである。議長を務めた伊勢神宮宮司田中頼庸により、強引な会議進行で、この提議は抑えられたのである。

その後も神道会議や、会議前に書面にて、都合四回同様な提議をしたものの、伊勢派が多数を占める事務局詰により、議題となることはなかった。尊福の提議を議題に取り上げなければ、会議は間違いなく紛糾したのであろうし、多数で「大国主神表名合祀」は可決さ

れたであろう。伊勢派としては、議題とする事さえ、許すことはできなかったのである。

三 神道教義論争

出雲派の主張の根拠は二つあった。第一は、篤胤の唱えた、「頭政の大権は天孫天皇、幽冥界の大権は大国主により委ねられており、国民皆死後は大国主により審判を受ける」という幽冥界主宰神論であり、『日本書紀』垂仁天皇紀に所見があると主張したのである。

第二は、刻苦碎身して国土を平定し、神勅により、拡大した国土を天孫に譲り、以後皇基を護り続けた功績である。これらにより、大国主神は、造化三神・天照大神に匹敵する、としたのである。

これに対し、伊勢派は、第一の幽冥界主宰神についての神典はなく、一家（尊福や篤胤）の私言に過ぎない。しかも、天皇でさえ、死後は大国主の配下になってしまう、として反論した。また第二の国土平定については、スクナビコナ神、大和平定した大物主神や大国魂神も同様な功績があると論じた。そして何よりも、大国主神は天地、衣食住が生じた後の神であり、イザナギやイザナミ、スサノウ、ニニギノ尊が先に祀られる神であると主張した。さらに天津神ではなく、国津神にすぎず、八百万神の一神であるとしたのである。

最大の論点は、幽冥界の主宰神であるか否かであるが、日本書紀では、一説として取り

上げられているにすぎず、しかも大国魂神として記載されている。大国主神と大国魂神とは別神との説が強く、伊勢派の主張の方が、教義上は正論と見做されるべきであった。しかし、神道教義論争では、薩摩藩士出身の頼庸や折田年秀（湊川神社宮司）では、古典、神典に造詣が深い尊福、本居国学継承者本居豊穎東京分局長、篤胤の継承者平田鉄胤らに、何時も太刀打ちできなかった。

明治一三年には事務局直属の分局である東京府分局（本居分局長）が、反乱を起こし、神道事務局は、伊勢神宮東京出張所内に間借りしているうえ、伊勢派に牛耳られており、出雲派の主張をことごとく握りつぶしている

と、内幕を暴露し、全国の神官に飛檄した。この頃には、罵詈雑言の非難合戦になり、人身攻撃や中傷、暴露等、神明に仕える神官とは思われない、激しい争いになったのである。

例えば、伊勢派は、尊福の名誉を傷つける為、「千家家は出雲国造の傍流であり、本流は北島家である」との文書を全国の神官に送付した。また北島家の抱き込みを図るため、北島家分家を伊勢派に取り込んだりした。又両派の怒鳴合いから、名誉棄損の裁判沙汰になり、新聞でも報道された。

四 内務省社寺局の調停

世間から非難された神道事務局神殿を巡る争いに、政府は黙視できず、内務省社寺局長

桜井能監は、三条太政大臣、岩倉右大臣、松方内務卿の内諾を得て、次のような調停案を、両派に提示したのである。

一 現行四神に加え、イザナギ、イザナミ、ニニギノ尊、大国主神の四神を新神殿に祀る。但し表明合祀しない。

二 神道事務局管長には、伊勢神宮齋主久邇宮が、副管長には、田中頼庸と千家尊福の二人が、各々就任する。

これに、出雲派は同意したものの、伊勢派にとつては、承服できるものではなかった。

しかし、社寺局長の調停であり、正面切つて反対はできない為、久邇宮の管長辞退、頼庸の副管長辞任を表明し、桜井局長案に反意を示したのである。伊勢派はこれ以後、聴訟運動や明道報告頒布など、反撃を強め、一層両派の争いは激化したのである。

明治一三年末、政府としては、最早こうした状況を放置できず、勅裁により神道会議を開催し、最終決着を図ることとしたのである。当初開催に反対した伊勢派は、新たに「神道は天祖の大道である。天裁を仰がず、祭神を決めようとするから、議論しあい混乱する。祭神は勅裁に依るべきだ」と主張、これを条件として会議の開催に同意した。

これに対し尊福は、あくまで神道教義上の問題であり、事務局一神殿の祭神を、勅裁に頼ることではない、として反対し続けた。

しかし、政府は論争解決の最後の手段として、神道会議開催を急ぎ、参議まで動員して、尊福を説得した。こうした情勢に、尊福も神道会議開催と勅裁による祭神の決定に、同意をせざるを得なかった。明治一四年二月、次のような勅裁が下された。

一 祭神は宮中齋祭所の神霊によること。宮中では、真中に賢所(天照大神)、右に皇霊殿(歴代天皇と全皇族)、左に神殿(八百万神)を設けていた。

二 管長は一品有栖川宮親王とする。副管長は議官岩下方平とする

この勅裁には、神官誰も異をとねえることは許されず、瞬く間に論争は終結し、勅裁による祭神を新神殿に祀り、遥拝式が挙行された。こうして六年の長きにわたり続いた論争も、伊勢派の主張通りとなり、出雲派の敗北に終わったのである。

五 神官の不安と熱望

何故、政府の神道政策を擁護する伊勢派が、僅か五〇年前に篤胤が唱えた新しい神道(復古神道)を主張する出雲派を、抑えることができなかつたのであろうか。

伊勢派は元薩摩藩士が中心で、古典や国学に疎く、一対一の論争では、常に出雲派に遣り込められた。しかもこの時期薩摩閥の中心人物である二巨頭を相次いで失っていた。明治一〇年西南戦争で西郷隆盛は自刃、明治一

二年大久保利通は暗殺され、強力な指導者を欠いたことも要因であらう。

しかし、最大の要因は、大多数の全国の神官が出雲派を支持したことである。維新政府の神道国教化政策への不満と、神祇官の再興が実現したものの、その後は、神祇省、教部省そして内務省社寺局と格下げが相次つぎ、国民教化運動も成果を得ることができず、今後の神道政策に不安を駆りたてられたことであらう。政府と一体となつた伊勢派との論争では、圧倒的に出雲派を支持したのである。

しかし神官達を出雲派に加勢させた最大の要因は、篤胤の復古神道を引き継ぎ、進展させた千家尊福による大国主神幽冥界主宰神論であつた。古来より、神道では、人の死は最も大きな穢れであり、この穢れを避けてきた。

ところが、仏教各派は、死後の世界を民衆に分かりやすく広めた。現世は貧乏で不幸かもしれないが、祖先を敬い、仏に功德を施すことにより、来世は、必ず極楽浄土の世界に行くことが出来る、という教えである。

葬式から始まり、初七日、四九日、月命日、と続き、一周忌、三、七、一三、一七、二三、二七、三三、五〇、そして百回忌まで、祖先の法要を行った。年に幾度も法要が営まれ、その都度お布施が入り、寺の財政を潤し、財力を蓄積できたのである。一方神官には、安

定した財源はなく、仏教の財力を唯、羨ましく見ているだけであった。

こうした中で、篤胤の復古神道は、「人は死後、幽冥界に行き、現世の行いを大國主神の審判を受けることになる」と提唱した。神官が熱望した神葬祭が、やれることになるのである。もはや、仏教僧侶と同じく葬儀から始まり、幽冥界を人々に教え導くことで、財政基盤が確立できるのである。それ故、祭神論争では、出雲派を支援したのであった。神社を護る神官としては、最も切実な経済困窮の解決に、光が見えてきたのである。

尊福が維新政府、薩摩藩閥官僚、伊勢神宮、天照大神を相手に一步も引かず、大國主神を、造化三神、天照大神と肩を並べて、表名合祀せよ、と迫ることが出来たのは、神官の熱望がその背景にあったのである。

六 国家神道と神道系新宗派

論争後は、造化三神は神宮からも取り除かれ、いつの間にか神道教義上その位を失い、忘れ去られてしまった。無論復古神道も否定され、天照大神が神道の中心神になった。祭神論争に懲りた政府は、次に、神官の教導職兼務を廃止し、国家の祭祀に専念させることにした。神葬祭は取り扱いを禁止した。こうして国家神道が完成したのである。一方従来の神社系神道の一部は、事務局から独立し、宗教活動を始めた。尊福は神道大社教を創始

し布教活動に邁進した。その他、山嶽系の富士信仰から扶桑教や実行教、御嶽信仰から御嶽教などが創始された。幕末創始された神道系新宗教の黒住教、天理教、金光教の信者拡大は目覚ましく、これら新宗派をふくめて、一三の教派が政府により公認されたのである。

七 薩摩閥の凋落と長州閥の興隆

この論争は、一面では政府・薩摩対出雲の様相を呈した。長期間千家尊福を中心とする神官達は、巨大勢力に対峙し、勅裁という手段によるまで、激しく抵抗した。しかし、最後まで、長州藩閥の動きは見られず、常に高みの見物の姿勢であった。尊福に親近感をもつ長州、特に伊藤博文が調停すれば、早く収まったことであろう。長州藩閥としては、二巨頭を失い、悪戦苦闘する薩摩のお手並み拝見する態度をとることで、相対的に長州の権力向上を目論んだのかもしれない。また、真宗と親しい長州としては、島津義弘の朝鮮出兵以来、キリスト教と同様真宗禁教（かくれ念仏）をした、薩摩藩の宗教政策に対する仕返しだったのかもしれない。

いずれにしても、この論争以来、明治立憲体制を作り上げるのは、権力を独り占めした、伊藤博文や山形有朋ら長州出身者であり、明治中期以降、政治の中枢を握ったのである。

参考文献

『明治国学発生の研究』（藤井貞文）

事務局便り

(一) 会員の訃報

小田紘一郎氏が去る四月三日にご逝去されました。長年腎臓病で人工透析をされておりましたが、この年初より心臓病を併発され、この度の悲しい訃報となりました。

長年当会で、ご専門の源氏物語の新解釈や、ワグナーの楽曲の数々のご造詣を、ご披露頂き史遊会に新風を吹き込んで頂きました。

ここに謹んでご冥福をお祈りします。

(二) 会員の退会

鯨遊海氏が、健康上の理由から昨年末を限りに退会されました。

(三) 会員の休会

鍋屋次郎氏が、家庭事情から年初より休会される事となりました。

重鎮のお三方が非稼働となりましたが、これを機に新規会員のご加入を大歓迎しますので、奮ってご参加ください。

以上

自由執筆

シルクロード見聞録③

高昌故城と玄奘三蔵のこと

慕史堂 中込勝則

西域の歴史は国や民族の興亡の歴史である。中国本土では唐の太宗のころ、西域において、まことにちっぽけな国が滅亡した。この国は高昌国といいトルファン盆地にあった。

この国が興ろが亡びようが、世界的にはどうということもない小国だったが、中国仏教に果たした役割は、まことに大きかったといわねばならない。まず、この国があったトルファンというところから話を始めよう。

(1) トルファン（吐魯番）

トルファン市は、ウルムチの東百八十三^キにあり、古くは、天山南路の天山北道と南道の分かれるあたりにあり、東西交易の要衝として栄えた。現在でも鉄道のウルムチ方面へ行く蘭新線とクチャ・カシュガル方面へ向かう南疆線の分岐点にあつて、交通の要衝としての重要な地位はおとろえていない。

トルファンという所は海拔が非常に低く、トルファン市自体は海拔〇^キ前後、市街の南三十^キにあるアイディン湖は海拔マイナス一

七五^キで、世界で死海に次いで二番目の低さという。ウルムチからバスで行き、トルファン盆地に入ると、だんだんと樹木が見えてきて市街に近づいたことがわかる。それまでの砂ばかりの風景が緑に替わってくるのはうれしい。

すると、まだ沙漠のところのあちらこちらに、日干し煉瓦をうまく組み合わせて壁に通風の穴がたくさん空いた建物が見えてくる。これは、この土地特産の干しブドウを作る小屋だ。トルファン盆地は、一年間の降水量が十八^リ、蒸発量が一千^リという土地で、低い盆地のため熱がこもりやすく、夏の最高気温は四十八[℃]に達した記録があり、乾燥していてとにかく暑い。昔から「火州」とよばれる所以である。

乾燥小屋にブドウをつるしておくだけで、立派な干しブドウになる。沙漠はある意味ではすごく清潔なのである。乾燥して生物が住めず雑菌すらないから、ぶどうは腐敗せず干しブドウを作るには適している。

天山山脈からひいた雪どけ水を利用しての農業がさかんで、ぶどう・ハミ瓜・綿花などが特産品である。

トルファンが低い盆地の底にあるために鉄道は通っていない。列車が低い市街に降りてしまうと、今度は上に登れなくなるためだ。

このため、「トルファン駅」は、市街から北西に約六十^キもはなれた「大河沿鎮」（鎮は村の意）というところにある。

(2) 高昌故城

高昌故城は、トルファン市街から東四十^キのところにある高昌国の城址遺跡で、カラホージョと呼ばれる。漢の時代にこの地に屯田兵のための砦が築かれ、以後、麴氏高昌国や西ウイグル王国の国都が置かれた地で、その遺跡である。総面積二百万平米、周囲は五^キにおよぶ。

城址は外城・内城・宮城の三つに分かれているが、木造の建物は一切なく、すべては日干し煉瓦でつくられた遺跡で、ながい年月の間に崩れたものが多く、一部修復も進んでいるが、一帯の風景は荒涼としている。

トルファンの歴史を簡単に振り返ると、五^〇七世紀に漢族の移民によつて高昌国が建設され繁栄をきわめた。四九八年に麴嘉が漢人王朝の高昌国を建てた。

その後、麴氏高昌国は七世紀までつづき、シルクロードの中継基地として繁栄していた。

(3) 玄奘三蔵の取経の旅

唐の時代に、玄奘三蔵はインドに向かう途中、ここ高昌国に立ち寄った。

玄奘三蔵のインドへの旅は、はじめからさまざまな苦難の旅だった。彼がインドに行つてさらに仏教の奥義を究めたいとねがいでたとき、唐の朝廷はこれを許可しなかった。というのは、唐朝成立後まだ日が浅く鎖国体制をとつて国の出入りを厳しく制限していたからだ。彼はやむなく、貞観三年（六二九）二十八歳の時に国禁を冒して長安を発つた。

以来、高昌国まではほとんど死ぬ思いの旅で、特に玉門関をでて、ゴビ砂漠＝別名莫賀延磧（はくがえんせき）を越えてハミに到着するまでが一番苦しい旅だった。「空に飛鳥なく、地に走獸なし」といわれ、道しるべは、行き倒れた人の白骨やラクダの糞だった。

シルクロードは「苦しロード」なのである。水も乏しく食糧も底をついて従者は逃げ帰つてしまい、一人でようようのことでハミまで来たのであった。

（4）高昌国王の麴文泰による歓迎

高昌国王の麴文泰は、唐から名僧がやってくるというのでハミまで出迎えるの使者をつかわして最高の待遇で迎えた。玄奘はここに二ヶ月ほどとどまって説法をした。国王は、三蔵のために自ら食事をささげ、彼が説法をするときには家臣たちを引き連れてそれを聞き、

彼が説法壇に上がるときには踏み台として国王が自らの背中を貸したという。

彼は、国王からインドなどへ行かずとここにどまって国民に説法をしてくれるように懇願されたが、仏法を修行したいとの大望のある玄奘のインドへ行こうとする意志は固かった。

国王は、彼の意思が固いことを知って無理にひきとめることをあきらめ、彼に、これから天竺往来二十年分の旅費として、黄金一百両・銀貨三万銭・綾絹五百匹・法具三十具・天山越えの防寒具としての面衣・手袋・靴・足袋などを贈り、輸送用の馬三十頭・人夫二十五人などを支給した。また、インドまでの西域道々の二十四の国王に、三蔵一行の保護を依頼する手紙を書いて持たせた。麴文泰の三蔵への帰依がいかに厚かったかを物語る。特に大きかったのは、西突厥の統葉護可汗

（トシヤグブカカン）への紹介状だった。この頃、

西域一帯は西突厥の勢力下であり麴氏高昌国もその勢力の傘下にあつて、国王麴文泰の曾祖母は西突厥の可汗の娘であり、麴文泰も妹を可汗の皇太子にとつがせていた関係もあり、これは大きな後盾となつた。

統葉護可汗には、三蔵に贈つたものとは別に綾絹五百匹、西域二十四国の国王には紹介状一通毎にそれぞれ大綾一匹が用意された。

玄奘は高昌国を發つてクチャを経て、天山山脈のペダル峠を抜け、素葉城（スイアブ）にあつた統葉護可汗の王庭にいたり、そこで可汗から盛大な歓迎を受けた。

可汗は諸国への命令書を作り、西域諸国の言葉を話せる男を探して、途中まで玄奘を送らせた。この道はいわゆる天山北道で、ステップルートともよばれ、オアシスが点々と並んでいて、緑草豊かな道だ。やがてタシケント・サマルカンドをへてヒンドークシユ山脈を越え、カブール・イスラマバードにいたる。

こうして高昌国王の支援を受けて、以後の旅は、死と隣り合わせの旅ではなくなった。

（5）高昌国の滅亡

やがて三蔵がインドでの修業をおえて十七年後に帰国する途中、ふたたびこの地を訪れようとしたが、六四四年に、途中たちよつたホータンで麴氏高昌国は唐によつてほろぼされたことを耳にした。そこで高昌国に立ち寄ることをあきらめ、いわゆる西域南道のルートをとって唐に帰つた。この地の攻防の歴史の激しさを物語る。

三蔵が唐を出国するときは、国禁を冒しかくれるようにして旅立ったのだが、帰国したときには、太宗はまだ健在で盛大な歓迎をもつてした。彼が持ち帰った經典は長安の大

雁塔に收藏され、経典の翻訳にはたくさんのお僧をつけて手伝わせたことはご承知のとおりである。

(6) 高昌国の滅亡原因

それは、高昌国の西にあった焉耆国（えんぎこく＝カラシャール）との対立だった。このころ東西交通路のうち古い天山北路はあまり使われなくなっていて、高昌国を通るルートがもっぱら用いられていたのであるが、焉耆国は古い天山北路のルートを復活しようとした。

その方が自国に利益をもたらすと考えたのであろう。ところが、東西交易のメインストリート（要衝）として栄えていた高昌国にとつては、それは一大事である。それだけでなく、隣り合っている国同士は仲が悪いものだ。

高昌国は焉耆国をいきなり襲って、略奪して引き上げた。焉耆国はこの暴挙を唐に訴えた。かねてより、焉耆国も高昌国も東の大国の隋や唐に対しては、常に朝貢してよしみを通じていた。高昌国王麴文泰自身も、都長安を訪問して、隋の煬帝にも、唐の皇帝太宗にも会って来た。しかし、今回の件は焉耆国の外交がまさっていたのか、焉耆国が高昌国の暴挙を唐に訴えたとき、唐は高昌国に問罪使を送った。朝貢を怠り藩臣の礼を欠いていたことも問罪の理由であった。麴文泰は、少

し唐という大国を見くびっていたのかもしれない。この問罪使にたいして麴文泰は聞き直り、謝罪の意を表明しなかった。そして、麴文泰は、次のようにうそぶいていた。

——唐からこの高昌国までは七千里も離れている。そのうち二千里は沙漠で、地に水草なく、寒風は刀の如く、熱風は焼くが如くではないか。唐がどうして大軍を送ることなどができようか。唐の国力など大したことはい。大軍を送れば食糧の手当てができない。たといこの城下まで来ても二十日も包圍できない。引き上げるに決まっている。その時追撃すればよいのだ——と。

麴文泰は先にせっかく長安を訪問して太宗にも会っていながら、唐という国家の実力も、太宗の人物も見抜けなかったのである。太宗は彼が思っていたほど生易しい男ではなかった。それでも太宗は、親書を送って禍福を説き、麴文泰の入朝をうながした。長安にさえすれば、いままでのことは水に流し、東西交通路の問題も二つの道を使うことで解決を図る考えだったのだが、麴文泰は入朝しようとはしない。

こうなったら太宗の決意は固まり、高昌国に大軍をむけた。大軍がせまると麴文泰は恐れおののいて為すところを知らず、病を發して歿した。その子の麴智盛がたつて国王とな

った。唐の貞観十四年（六四〇）のことだった。

高昌国の一方の後盾だった西突厥も、このころ内部に勢力争いがあつて唐と戦うまでの勢いがなく、途中までおさなりたいに兵を差し向けたのみで、引き揚げてしまった。

こうなると、高昌国はひとたまりもない。城門を開いて降伏した。新国王以下、主だった者は長安に送られ、高昌国は初代からかぞえて九代、百三十四年でほろびた。唐はこの地を直轄領として、安西都護府も一時、このトルファンに置かれた。（その後、唐の西域經營がもつと西に進むにつれて、安西都護府はクチャに移った。）

玄奘三蔵がインドで修行している十七年の間に、この地ではこうした事変があつて、高昌国は滅びてしまっていたのである。高昌国王麴文泰による玄奘への支援がなかったならば、彼のインドへの旅も成功したかどうか。この意味で、このちっぽけな王国の存在は、その後の中国における仏教の興隆に大いに貢献したと云って過言ではない。

自由原稿

ロボットのこと

三戸岡 道夫

少子高齢化時代に入った日本経済の中で、最近では人手不足への対応が必要になってきている。

日本の労働人口は年五十万人ペースで減り、二〇二五年(平成三十七年)には約六千万人へと、労働人口は減少するという。

人手不足と言うと、すぐ外国人労働者を活用する問題が起きてくるが、いろいろ難しい問題が起きてきて、大変である。

そこで最近目を付けられているのが、ロボットである。最近ロボットの世界では、次から次へと新技術が開発されて、ロボットの性能が向上している。工場生産の機械として働くだけでなく、人間のサービス分野や家庭生活の中に入って、種々の便利な機能を果たすように進歩してきている。そしてまだまだ未完成の分野が多いのであるが、その研究開発のスピード速まっている。そしてロボットは、外国人労働者のような社会的問題を起さない。すると人手不足は、次第にロボットによって解消されていくであろう。

最近のロボット(人工知能)の進歩は著しい。一部の未来学者は、

「今世紀半ばには、自意識を持ち、人間並みの認知能力を持った人工知能が生れる」と予測する。人工知能やロボットは、どこまで賢くなるのであろうか。

大量のデータを統計的に分析し、特定のパターンや規則性を見つけ、答えを確率的に推測する、それが人工知能の基盤をなしている。それが急速に進歩している。

少し前までは、将棋はチェスよりルールが複雑なので、コンピューターが勝つのは難しいと言われていた。しかし現在では、人工知能が将棋のプロ棋士を負かすことが出来るようになった。また打つ手の選択が、チェスや将棋よりも桁違いに多い囲碁でも、あと十年くらいで人工知能が囲碁のプロのトップレベルに達すると言われている。

また最近では企業でも、社内に蓄積された膨大な報告書や電子メールなどのデータの中心から、必要なデータを選出する作業に、人工知能を使っているが、

「人間の手で五十時間かかった作業が、人工知能では一分で出来る」という。

将棋もデータ探しも、基盤となる技術は「機械学習」である。多くの過去の棋譜や、

ベテランの社員のデータ選別のやり方を学び、勝利につながる一手や、会社経営の重要なデータを見つけるのである。そうした学習で、人工知能はコツや勘に似たものを会得するのである。そしていったん会得すれば、その後の作業は速いのである。

このようにロボットの世界では、次々と新技術が開発されて、ロボットの性能が向上している。従来のような工場生産の機械として働く分野から、人間のサービス分野や、家庭生活の中に入って、種々の便利な機能を果たすようになる。

すると人手不足は、次第にロボットによって解消されていくであろう。いや解消されるどころか、労働市場がロボット中心で動くようになり、人間が働きたくても働けない、人間がロボットによって失業に追い込まれる状態になる危険があるのである。これはどうすればいいであろうか。

近い将来なのか、遠い将来なのかかわからないが、人工知能、ロボットには、このような力があるのである。従って今後、人工知能ロボットをどのように開発していくのか、どのように使っていくのか、大きな社会哲学が必要になるのである。

自由執筆

沢彦 宗恩

(織田信長の指南参謀家)

安田 保之

これまで織田信長を題材にした小説やドラマに数多く接してきたが、信長の人格や人間性を芯から支えた指南参謀役に触れたものは記憶にない。信長の天下統一の理念である「天下布武」、その過程で起きた宗教弾圧、即ち比叡山延暦寺焼き討ち、長島一向一揆の征伐、および石山本願寺攻めなどが、どのような理念に基づくのか、永らく疑問が解けなかった。しかし最近、若くして夭折した歴史小説家の火坂雅志氏著の小説「沢彦」を読み、漸く私の長年の疑問が氷解した。

この禅僧沢彦(たくげん)和尚は、はじめは禅宗の妙心寺東海派の泰秀宗韓に師事し、後々には美濃の妙心寺派の大寺である大宝寺住持となり、織田家家老で信長養育係の平手政秀に請われて、青少年期の信長の教育係となる。後に信長の経綸や戦略に参与する参謀指南役として活躍、晩年は総本山の妙心寺大住持にも上り詰める名僧であった。

妙心寺の東海派からは、武田信玄に請われて菩提寺である恵林寺の住持となる快川紹喜、また霊雲派からは今川義元の名参謀となる太原雪斎を輩出、雪斎和尚は人質時代の徳川家康の育ての親としても有名、いずれも武田家と今川家において高僧且つ名参謀として活躍した。戦国の大名たちは京都の一流学問所で学んだ学僧の頭脳を求めて、重要な参謀として国の統治や外交の戦略家として重用する。

禅宗臨済宗は、栄西が平安末期、南宋で学び日本に導入した宗派で、当時墮落していた日本仏教の立て直しを図り、長年君臨してきた比叡山延暦寺から痛烈な排斥を受けるが、折しも鎌倉期への移行期で反朝廷の鎌倉幕府の庇護を受けて、京都に建仁寺を建立した事に始まる。教義は「坐禅・公案」による「自力本願(唯物論的真理の追究)」を基本とし、「一向専修・一念發起(念仏)」による「他力本願」を基本とする浄土系仏教とは一線を画するものであった。臨済宗妙心寺は、一三四年に慧玄が開山し、室町期は幕府庇護の禅林と対峙した林下の代表的存在として、修業を重んじる厳しい禅風をもって、武家社会に多大な影響を及ぼしていた。

信長は尾張統一後、一五六七年美濃攻略を果たし、斎藤氏の城下町であった井ノ口を「岐阜」と改名し、沢彦和尚より与えられた「天下布武」の朱印を使い始め、本格的に天下統一を目指すことになった。

「天下布武」は中国の「春秋左氏伝」から引用したもので、「七徳の武を備えた者が天下を治める」を意味する。「七徳の武」とは、「七徳をもって一歩踏み出す」または「七徳をもって戦いを止める」と理解され、「暴を禁じ、戦いを止め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、財を豊かにする」の七徳が天下統治の理念となったのである。

その後、天下統一を進める中で第一次信長包囲網(足利義昭主導の朝倉義景・浅井長政連合―石山本願寺・一向衆徒)、第二次信長包囲網(足利義昭―朝倉義景・武田信玄・勝頼―石山本願寺・一向宗徒)、および第三次信長包囲網(毛利輝元―石山本願寺)など宗教を絡めた多くの敵対勢力の攻撃を受けた。

しかし、武田信玄・上杉謙信の両巨星の急逝による敵対勢力の弱体化に救われ、織田・徳川連合は窮地を凌ぎ、播磨以東駿河までの本州の中心部を統一した。しかしこの時点で、

信長は道半ばで四十九歳の生涯を閉じたのである。

信長は沢彦和尚の教育を純粹に受け止め、唯物論的且つ合理的思考をもって、正義・不

五月講演要旨

遙かなる河西回廊の旅

中込勝則

五月中旬から下旬にかけて、中国河西回廊地帯を旅したので、この地方の歴史を踏まえ、現地の最近を報告したい。

いわゆる西域は、国と民族興亡の地であつた。河西地方は、前漢の時代に、漢と匈奴が激しく戦つた地で、漢が衛青・霍去病などの大活躍によつて、ついに匈奴を北に追い、敦煌Ⅱ沙州、そこから東へ、安西Ⅱ瓜州、酒泉Ⅱ肅州、武威Ⅱ甘州の四郡をおき、漢人を移住させた。これによつて、対匈奴防衛線ができ、前漢の勢威は西域に及び、さまざま文化・文物が中国本土にもたらされた。

正義の判断をし、神および仏の礼拝・尊崇・迷信行為を一切軽蔑していた。従つて守旧派

勢力の権力欲および教義から逸脱した延暦寺と他力本願を教義とする浄土系仏教勢力が民を支配する事は信長にとつては容認できない事であつたのではないか。このように沢彦和尚の教育を受けた信長の思想は当時では先鋭的過ぎて、これを認めようとする者は極めて少なく、これが命取りになつたのではないか。本能寺の変の頃、沢彦和尚は信長の元から既に離れており、昔の教え子の信長の死をいかに受け止めたのであろうか。 終

小田絃一郎君への弔辞

中込勝則

まず最初に、このたびの小田絃一郎君のご不幸につきましては、ご家族・ご親族の皆様
の悲しみは如何ばかりかと、衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、亡き小田君のご冥福をお祈り申し上げます。

以下、小田絃一郎君のご霊位に対して、長い付合いだつたときのままの普段の言葉で、お別れを申しあげます。

小田君よ！ そうか、君はもう居ないのか。君は、ここ数年來、宿痾ともいふべき腎臓の病に冒され、人工透析を週に二、三回も受けてつ、それにもめげず、いつも天性の明るさで、我々につきあつてくれていた。しかし、薬石効なく、ついにこの日を迎えられたということは、悔やんでも、悔やんでも足りない。

実は、今年の一月ころだつたかと思ふけれど、君が電話をくれて「心臓に水が溜まるので、一週間ばかり入院することになり、史遊会にも欠席するから、会えません、よろしく」という。いままで、入院に際してそんな電話をくれたことは無かつたのと思ひながら「大事にしるよ」と云つたのが、いま思えば、最後の会話だつた。

君のように、腹に一物も無く、いつも明るく朗らかだつた好男児を、世間一般の例からすれば、まだまだ若いともいえる時期に奪つて行つた天を、おれは、恨む気持ちで胸がいっぱいだ。

思いおこせば、君とのつきあひは、我々が大学の明善寮時代から数えて、五十年の長きにわたつた。君は、一年次下で農学部に属し、

私は経済学部で学部はちがったが、寮では同じサークルに属し、ともに語り合い、酒も飲み、青森・秋田など東北一周旅行もした。

やがて、社会人となり、君は農林省に進み、少壮官僚として活躍し、予算編成のときには、省に泊まり込みで事に当たった話なども聞かせてくれた。

卒業してから後も、私は、君の伊豆のお宅に泊めてもらって、伊豆半島を巡ったことがあった。そのころは、君のお父さんもお元気で、大室山を案内してくれて、頂上より夕陽をながめ、帰る際には、ミカンをたくさんお土産に頂いたりもした。

君が、ここにおられる奥さまと結婚することになり、伊東市内のホテルで華燭の典を挙げられたときには招待していただき、二人で肩を組んで、「東北大学明善寮歌」を歌ったりもした。また、君は小田家の長男として生まれ、君をことのほか可愛がっていた君のおじいさんが健在で、孫の結婚を大層喜んでおられた。

社会に出てからは、お互い忙しくなって、顔をあわせることも少なくなっていたが、君のお父さんは、山梨のわが実家に、秋になるといつも、ミカンをたくさん贈って下さった。こちらからも、夏に桃をお贈りして、息子たち

は離れていても、両家の付き合いが長く続いた。今となっては、すべて、懐かしい思い出だ。

そして、お互いが定年を迎えるころから、人恋しきとでも言おうか、むかしの仲間とのつきあいが復活し、年に一度は、フグ鍋などをつつきながら、旧交を温めあったものだった。また、君は折にふれては近況を、あの独特のくせのあるへたくそな字で、よく手紙やはがきで知らせてくれた。

さらに君は、日本のコメ問題の本を著したが、仕事方面の活躍だけでなく、いつのころからか、『源氏物語』や『奥の細道』に傾倒して、いろいろところで講演をしているという。私もなんとか聞かせていただいたが、その博識ぶりは、「マジに、あの小田か」と思わせるほどのすばらしさだった。

それを聞いてから、私も属している「史遊会」という歴史を勉強する会にも参加するよう勧め、そこでも、有力な会員の一人となつて、二時間にもわたる講演をたびたび聞かせてもらった。

そのほかに、『まんじ』という小説やエッセイの会にも属して、『源氏』や『奥の細道』について発表していた。君は官僚としての才能だ

けではなく、読書人としても多芸な才能を咲かせたナイスガイであった。

その君が、もう居ないという。この寂しさを、これからどう埋めて行ったらいいのだ。

でも、「さようなら」なんていわないよ。

なぜならば、われわれもいずれそっちに行くときが必ず来る。そうすれば、また、会えるじゃあないか。そのときにはきつと、君の古典の蘊蓄はもつと幅広く、奥深いものになつていることだろう。そうしたら、また、話を聞かせて呉れたまえ。

わたしは、君の訃報を聞いて、この弔辞を書きながら、涙が流れてならなかった。今の気持を表すには「さようなら」なんて言葉だけでは足りない。別れに際して、中国では、「再び、相見えよう」という。あつちで、また会えるのを楽しみにしている。

満腔の悲しみをもって云おう。

「好漢！ 小田絏一郎君よ。再見！」

合 掌

小田紘一郎さんの『木もれび』

『木もれび(1) 退職後を楽しむ』を小田紘一郎さんが出版されたのは、昨年十一月であった。一月に最後の入院をされたので、お亡くなりなる直前に出来上がったこととなる。

小田さんは、史遊会に入られてから、十二編ものエッセイ等を『史遊会通信』に載せておられたが、その全てが『木もれび』に収録されている。実は、そればかりではない。『史遊会通信』に何時載せても良いという原稿を十四編もお預かりしていたのである。編集担当として、こんなにありがたいことはない。くせ字で読みにくいが、時間を見付けては、電子文字化していった。

その内に、小田さんが現役時代に、雑誌等に載せたものも含めて、出版をしたいのご意向であることを知った。「過去の印刷物などを送って下されば、電子原稿化するのをお手伝いしますよ」と申し上げたところ、更にいくつかの原稿が送られてきた。

結局、『木もれび』原稿の九十パーセント以上は、私が電子原稿化したことになる。それによって、『木もれび』の出版を早めることができたと思えば、小田さんのご好意に報いることができたと思う。

お預かりした原稿から、何かを選び『史遊会通信』に載せようと思ったが、スペースの関係もあり、『木もれび』の「あとがき」をそのまま紹介する。
(新井宏)

『木もれび』あとがき

小田紘一郎

退職して早いものでもう十年あまりになる。現役の頃と比べると、あり余る時間があり、毎日好きな事をして過ごしている。そして、退屈しないで過ごせることは幸いであると思っている。読書・音楽を聴くこと、自然を愛すること、旅をすること、孫達と遊ぶこと等々である。

この間、やはり同じく十余年、人工透析の身で、週三日病院通いをし、一日五時間ほどの時間を費やし、命をつないでいる。厚い医療制度に守られ、何ら日常の生活に支障はないことに感謝している。

その時間の大半を源氏物語や最近では、ワグナーの楽劇に費やしている。又、史遊会という歴史を学び、楽しむ会に参加、同時に「まんじ」という同人雑誌に投稿を続けている。これらの会には、同じような考えを持った人たちが集まっており、何かと刺激を受けている。月一回通信が発行されており、そこ

に年数回の投稿が義務付けられ、拙文がいくつかたまったので、その散逸を防ぐため、一冊の本にしておこうと思いついた。

又、現役時代にも書きたいいくつかの拙文も見つかり、書物の中に書いてある「あとがき」等も加えた。もとより世の中は大きく動いており、それらに関心がないわけではないが、日常何となく心に溜っているささやかなことを書き留めておいたものが中心で、まことにとりとめもないものである。

木もれびという題名にしたのは、近くに広大な雑木林があり、好んでそこを散策していること、その中でふと心に浮かんだものを消えてしまわないようにと書き留めたものであるからである。木もれ日よ、「見えぬ心を照らしておくれ」、「一人ぼっちにしないでおくれ」(美空ひばり みだれ髪より)。

今後もこのことは続けていきたいと思っており、出来うれば(1)に続き(2)、(3)……と出していければと思っている。

なお農業・農政関係の雑文は、現在整理中で近々発刊したいと考えている。

これまで多くの諸先輩、同僚諸氏には大変お世話になってきた。それへのお礼も兼ねさせていたきたい。

平成二十六年十一月三日(結婚記念日)

相模大野寓居にて